

「理性と感情；“分かる”とはどういうことか？」

2012年6月3日(日)

司会・文責：堀越

1. 概要；

- ・地元京都からの参加者4名も含めた総勢16名が参加し、普段は「分かった」気になっている「分かる」ということについて、それがどういうことなのかを根本に戻って考え、議論した。

2. 議論；

(0) テーマについて

- ・司会・テーマ選定者から、理性と感情における(理性で論理を、感性で感情をそれぞれ¹⁾)「分かる」の以下の特徴・違いを説明し、意見を募った：
 - a) 理性において「分かる」ときは、その事象・内容が何らかの形態で事前に知識として「分かっている」こと(既知)が前提となっていないか。「分かっていること」でないと「分からない」のではないか。
 - b) 感情において「分かる」ときは、分かり易い例で言えば、「共感」のように無条件に「分かってしまう」ことがありはしないか。
- * 「理性で分かる」の対義としては「感性で分かる」ではないか？の質問が出たが、手段(分かる方法)だけでなく、対象(分かる内容)を含めて考えているためと補足説明した。しかし、良く考えてみると、「理性的に分かる」、「感情的に分かる」というくらいの説明をすべきであったし、本来なら、テーマも「理性と感性」、または「論理(理屈)と感情」のように手段か対象かで区別すべきであった。

(1) “頭で”と“体で”分かる

- ・「理性で分かる」には“頭で”と“体で”の2種類の「分かる」があるのではないか。初めて見る複雑な機械機構(仕組み)を分かるためには、実際に目で見てまたは触って初めて分かるが、それが「体で分かる」ということなのではないか。
 - a) “頭で分かる”とは、理屈は分かっているが、体得できていない、本当には分かっている状態。
 - b) “体で分かる”とは、自転車乗りや水泳、鉋(かん)がけのように、理屈(“頭で”)では分かっていることをさらに進んで体得できた状態。
- ・この“頭で”、“体で”の「分かる」の方が“理性で”、“感情で”の「分かる」よりも受け入れ易い。

(2) 本当に分かる

- ・「理性では分からない」愉快殺人犯や売春婦の気持ちを分かるためには、実際にそれを実行し、体感をしてみないと分からない。それが「体で(感情で/本当に)分かる」ということであろう。
- ・「体で分かる」レベルに達しないと本当に分かったことにならないのか。単に「分かる」の質が異なるだけではないのか。

(3) “理性で”と“感情で”分かる範囲について

- ・感情ではどうしても理解できないことも、理性では想像できる。従って、その網羅できる範囲を考えると「感情的に分かる」範囲よりも「理性的に分かる(想像できる)」範囲の方が広い。この両者では、「分かる」ということの質のようなものが異なるのではないか。

(4) 感性で分かることを言語化する

- ・感性でしか分からないもの、例えば絵画などの理解を言語化することには、感性というどうしても言語化できないものを言語の土俵で語る難しさがあり、そのための一種の壁があるが、できると考える人もいる。それは、「感性での分かる」を「理性での分かる」に再構築できるということの意味する。
- ・その場合の「感性で分かる」は、ただ感性で感じる「快・不快」なのではないのか。「感性で分かる」ことを「理性で分かる」ことに変換などできるのか。
- ・ある程度は、「感性で分かること」をその描かれた背景やコンテクストを理解した上で、「言語的に分かる」に変換できるはずと考える人もいる。

3. まとめ；

- ・“分かる”ということそのものを分かりたい。やはり予想通り難しく、一種無謀な試みではあったが、参加者の方々の活発な議論にも助けられ、その考え方の糸口くらいは掴めたように思う。また挑戦してみたい。

以上